

差点

ある店を訪ねた。店員が2人、店に入った私に会釈することもなく、先客と話していた。待っても待っても声が掛からない。「まだ時間かかりですか」と聞くと「はい、かかります」と言う。何と心ない返事だろう。たまりかねて

「あと何分くらい待てばよいですか。いらっ

しゃいませのお

言葉もなく、ず

っと待っている

こちらの気持ち

になってくださ

い」と、つい口

走ってしまっ

た。

ふと、子供の

ころ父に言われたことを思い出した。たばこを持ってくるよう頼まれたときのこと、私は言いつけどおりにたばこだけを持っていった。次にマッチを、また灰皿を、と言われた。そのとき父は「たばこ

相手の立場で心遣いを

言われたらマッチと灰皿を一緒に持ってくる人になりなさい」と言った。相手の状況を察することのできる人、気遣

い、心遣いのできる人になっ

てほしかったのだと思う。

次の日、差出人なしの茶封筒が郵送されてきた。気味悪

くてくす箱に捨てたが、気にな

って恐る恐る開封してみ

た。何と、大事な依頼文書で

はないか。先方にお話しして

事なきを得たものの、あて名

1行だけの茶封筒が妙にわび

しく感じられて、前日の店で

の冷やかな思いと重なって

しまった。

次の日、風邪で医療機関へ

行った。帰り際に「保険証を

返してもらったっけ」と思

い、引き返して窓口で聞くと

「薬袋に入っています」と悪

びれもない。「ひい」と言

って薬を渡してくれたらいいのに」と思ったが、熱でポロっとしていた私は、それを言う気がなかった。

「もし、自分が相手の立場ならどんな思いをするだろうか」と、想像することができ

るのも、気付くのも人の能力ではなからうか。家庭や学校や職場で繰り返し訓練すること

で身につくものと思う。それが美しい言葉と行いになって相手の心に伝わっていく。

3日間の小さな出来事である。自らの戒めとしながら、亡き父の言葉をかみしめた。

(松本市波田、古畑博子、61歳)